

神戸に思う

社会保険労務士 中村 彰雄

私は、人生の大半を神戸で過ごしたためか、神戸が好きだ。青春時代、東京、京都などで過ごしたが、やはり神戸の「水」が一番性に合っている。京都は、学生には住みやすい街であったが、人間関係の難しさは一種独特であり、その街で育った者以外にとっては永住する気持ちにはならないところがあった。

また東京は、エネルギーで経済成長と若者の活力でガラガラとしたものがあり、希望と期待に満ちあふれていた。しかし、高村光太郎が智恵子抄で触れていたと思うが、「智恵子は東京には空がないと言った」というように、四方を見ても山も海も見えず、スモッグで一日中どんよりとした灰色の空が続いていた。神戸の緑の山と碧い海が恋しかったことを思い出す。

当時の東京は、まだ公害物質についての知識に疎く、さほど深刻な問題として受け止められていなかったように思うが、現在の中国を笑ってられるような状況ではなかったと思う。ただ、今や中国における公害物質の伝播はグローバルなものとなっており、自国の国民の健康のみならず他国の国民の健康にまで被害を及ぼそうとするような深刻な状況となっている。日本から提供された工業技術が不完全なものであったとの批判もあるようだが、今やそのような論争は不毛であり、このようなときこそ、日本はグローバルな視点を以て優れた技術力を提供し、公害物質の封じ込めのために協力すべき時が来ているのではないかと思われる。資源云々の問題もあるが、人も住んでいないような孤島をめぐっていたずらな争いをするよりも、人間が如何に健康的で豊かな生活を営めるかといった視点をもって外交や経済協力が為されるべきなのではないかと思われる。

第二次世界大戦後のドイツとフランスが協力して経済発展し、EUの基盤を築いたような歴史に学ぶべき時が来ているのではないだろうか。そして、そのような方向性を探ることが両国にとどまらず日・中・韓三国のウイン・ウインの関係に発展するのではないだろうか。何が主要で、何が主要ではないかを見定めるときが来ているのである。

さて、話は元に戻るが、神戸という都市は住みやすさでは群を抜いていると思う。しゃれたレストランや洋食、明石海峡でとれた新鮮な魚料理による和食、絶品の洋菓子やパンなど、食文化の多彩さではどこにも引けを取らないと思われる。しかも、大阪、京都といった極めて個性の強い都市にもすぐ近くに足を伸ばせるところに位置している。

しかしながら、我らが神戸は、現状において経済的・文化的な活力の面では今一步のところがあるのではないだろうか。この神戸の街をもうワンランク魅力的な街にして欲しいと新市長に望みたいものである。



所長 中村 彰雄

立命館大学法学部卒。1983年1月～2009年4月行政書士登録。1992年社会保険労務士登録。兵庫県社会保険労務士会理事4期8年、常任理事、神戸東支部長2期4年。社会保険労務士法人設立代表社員等を経て2011年2月江戸町社労士ファーム開設、所長就任。